

<実践報告>

平成 30 年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）における 学生による授業過程の評価

The Evaluation of Teaching Process by Students in Acute Phase Clinical Training (Adult/ Gerontological Nursing Training II) in 2018

千葉のり子¹, 長澤久美子¹, 富山ひとみ¹, 吉岡友美¹, 原澤純子¹, 原田千代子¹
Noriko CHIBA, Kumiko NAGASAWA, Hitomi TOMIYAMA
Tomomi YOSHIOKA, Junko HARASAWA, Chiyoko HARADA

1 千葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

【要 旨】

平成 30 年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）履修後の学生による授業過程評価のための質問紙調査により、教育の質向上のための課題を明らかにすることを目的とした。分析の結果、授業過程評価の質問紙 16 項目中 15 項目で「全く当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答し、肯定的な評価をした学生は 80% 以上であった。自由記載内容をふまえ、今後の課題として、事前準備の段階から、学生が自発的に学内で技術演習などの事前準備ができるよう、学生一人ひとりのレディネスに応じた教員の関わりが必要であることが示された。また、実習中は、臨床指導者と協働し、患者への援助や看護の工夫を場面ごとにタイムリーに指導し学修支援を行っていく必要がある。

Key Words : 学生 (students), 質問紙調査 (questionnaire survey), 急性期実習 (acute phase clinical training), 授業過程の評価 (evaluation of teaching process)

1. はじめに

看護職員には、知的・倫理的側面や、専門職として望まれる高度医療への対応、生活を重視する視点、予防を重視する視点及び看護の発展に必要な資質・能力が求められており、看護基礎教育については、看護に必要な知識や技術を習得することに加えて、いかなる状況に対しても、知識、思考、行動という

ステップを踏み最善の看護を提供できる人として成長していく基盤となるような教育の提供が不可欠である¹⁾。看護基礎教育において、各領域の臨地実習は教育の柱ともなる科目であり、学生が看護実践の能力を習得する上で大変重要である。

4 年生前期に履修する成人・老年看護学実習Ⅱは、周手術期・急性状態にある対象とその家族の健康問題を統合的に理解し、看護を

展開するうえで必要な知識，技術，態度を修得することが目的である．看護実践の場においては，臨床指導者と教員が協同し充実した指導が行えるように取り組んでいる．成人・老年看護学実習では，看護学科開設以来，学生による授業過程の評価を実施しており，著者ら²⁾の先行研究である，平成29年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した学生による授業過程評価において，学内演習で学修したことを応用する力の育成とカンファレンスでの学びの共有に向けての支援の必要性が明らかとなった．

それらの課題をふまえ，平成30年度成人・老年看護学実習Ⅱでは，既習知識の復習である事前課題を早期に提示し，基本となる看護技術演習を推奨し，実習に望んだ．また，実習中は教員と臨床指導者が，カンファレンスのテーマ設定において，実習での学生のおまじきや学びについて思考の整理を行った．また，カンファレンス中は，学生の理解に応じてメンバーで共有できるように積極的にアドバイスをを行った．

そこで，継続研究として，今回，平成30年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）履修後の学生に授業過程評価のための質問紙調査を実施し，教育の質向上のための課題を明らかにしたので報告する．

2. 急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）の概要

本学の急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）は，4年生前期に配置された4単位180実習で，3単位135時間の急性期病院，1単位45時間のがん専門病院の実習で構成されている．

3. 目的

急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）履

修後の学生による授業過程評価のための質問紙調査により，教育の質向上のための課題を明らかにする．

4. 方法

4.1. 研究対象者の選定

平成30年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した本学健康科学部看護学科4年生で，質問紙調査に同意が得られた学生86名である．本研究は，急性期病院における急性期実習終了後に調査を行った．

4.2. 質問紙の概要

平成30年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）終了後に無記名の質問紙調査を実施した．質問紙は，舟島ら³⁾の「授業過程評価スケール—看護学実習用—（10下位尺度42項目からなる5段階リカート尺度）」をベースとした先行研究⁴⁾を参考にして作成した，実習の構成・内容，指導技術，実習環境を問う16項目から構成される質問内容とし，実習で重要なカンファレンス内容については，独自に質問を選択した．

先行研究²⁾で用いた5段階リカート尺度については，選択肢のもつ意味を等間隔とするために修正を行い，「全く当てはまる」：5点，「だいたい当てはまる」：4点，「どちらでもない」：3点，「あまり当てはまらない」：2点，「全く当てはまらない」：1点とした．また，自由記載欄を設け，学生が意見を述べやすいように配慮した．得られたデータから全体の傾向について整理しまとめた．

4.3. データ分析

質問紙のデータは単純集計を実施した．自由記載については，研究者間で記載内容を検討し，1つの意味や内容にまとめた小項目とし，それを同類の意味と捉える内容で分類し大項目とした．

5. 倫理的配慮

研究参加は自由意思であり，学生の任意によるものであることを伝え，同意しない場合でも不利益を生じることがないこと，成績には一切関係しないことを書面で示し説明した．また，質問紙調査同意後の撤回やいつでも中止や中断ができることを伝えた．同意書の提出をもって同意したとみなすこと，個人情報・プライバシーの保護について説明した．研究結果の公表について，「常葉大学健康科学部研究報告集」に公表する予定であることを伝えた．なお，研究活動は倫理審査委員会の承認（承認番号：研静 17-27）を得て実施した．

6. 結果

6.1. 研究対象者の概要

平成 30 年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した 4 年生で，研究協力の同意が得られた 86 名であった．そのうち有効回答であった 83 名（96.5%）のデータを分析対象とした．

6.2. 質問紙調査について

全体の回答の割合を図 1 に表した．平成 29 年度同様に単純集計をした．

16 項目の中から，「全く当てはまる」：5 点「だいたい当てはまる」：4 点，と選択した割合は，「1. 学内オリエンテーションの内容は実習を円滑に行うために役立った」：86.8%，「2. 学内での技術演習の内容は実習を展開するために役立った」：56.6%，「3. 実習前・実習中を通して必要な学習課題に取り組むことができた」：84.3%，「4. 今までの学習内容を活用しながら実習を展開できた」：86.7%，「5. 実習の目的・目標をふまえた実習の展開ができた」：95.2%，「6. 受け持ち患者に対し，計画・実施・評価の一連

の流れに沿って実習を行うことが出来た」：84.3%，「7. 日々の実習内容を振り返りながら，それを活かして実習を展開できた」：87.9%，「8. 学生同士が協力し合うことができた」：87.9%，「9. 計画した援助を適切に対象者に行うことができた」：86.8%，「10. 必要に応じて実習担当教員に助言を求めることができた」：86.8%，「11. 必要に応じて臨地実習指導者に助言を求めることができた」：89.2%，「12. 実習担当教員は学生の質問に分かりやすく答えていた」：84.3%，「13. 臨地実習指導者は学生の質問に分かりやすく答えていた」：90.3%，「14. カンファレンスによって実習で実践した内容を振り返ることができた」：85.5%，「15. カンファレンスに積極的に参加できた」：84.3%，「16. 記録物・提出物の内容は，適切にまとめることができた」：80.7%であった．

16 項目中「全く当てはまる」「だいたい当てはまる」と学生評価が高かった項目は，「5. 実習の目的・目標をふまえた実習の展開ができた」：で最も高く 95.2%であった．学生評価が低かった項目は，前年度同様に「2. 学内での技術演習の内容は実習を展開するために役立った」56.6%であった．

6.3. 自由記載について

92 の自由記述から類似の内容を整理した結果，大項目では【指導者の協力的な姿勢による実習への動機づけの高まりや学びの深まり】【知識を持ち適切なアセスメントが重要であることの気づき】【カンファレンスでの学びの深まり】【教員への指導の要望】【物理的実習環境の整備の希望】の 5 項目にまとめることができた（表 1）．尚，【】は大項目，《》は小項目，をを表す．

【指導者の協力的な姿勢による実習への動機づけの高まりや学びの深まり】については，実習施設により《忙しくて質問がしにく

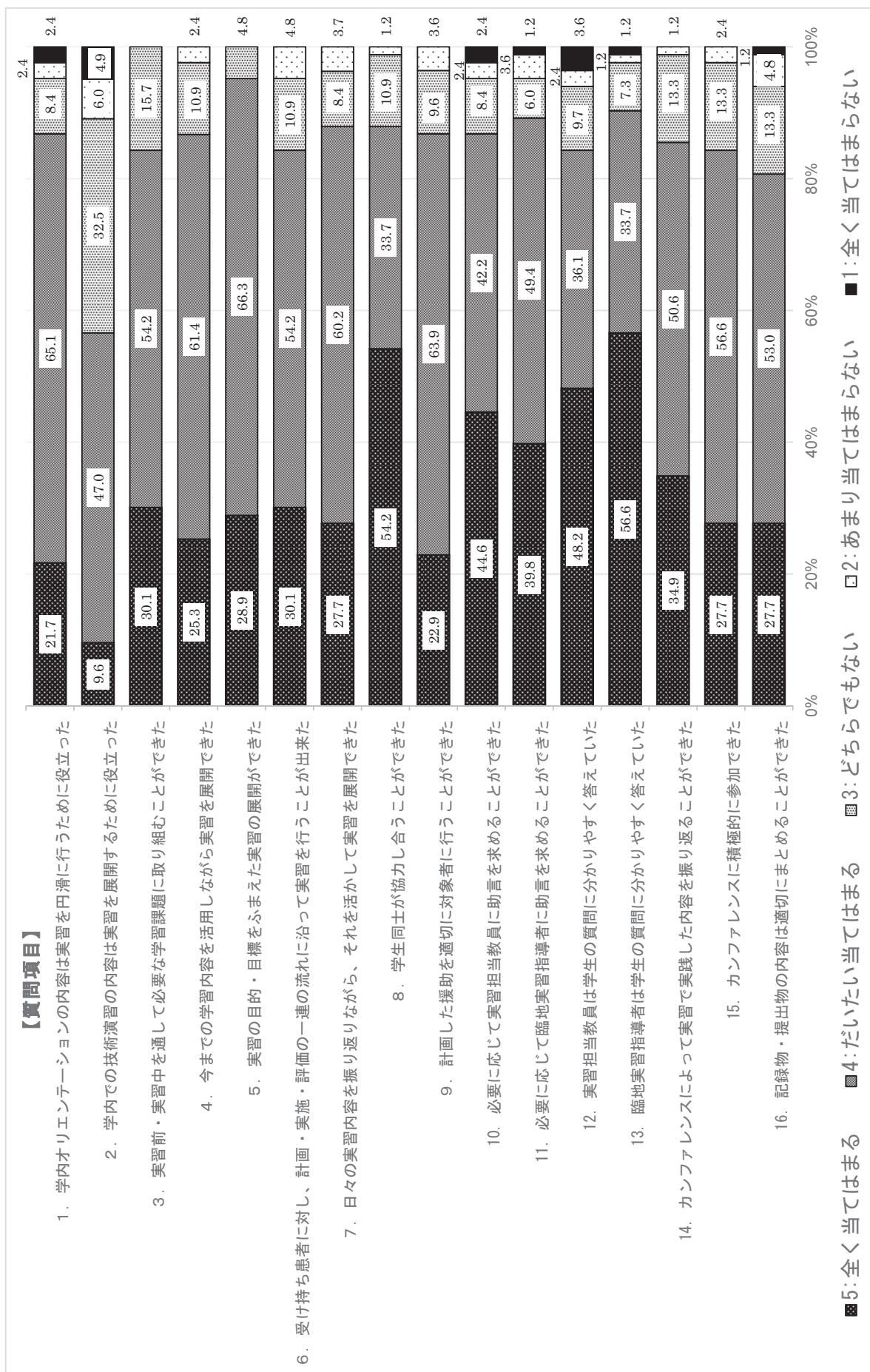


図1：平成30年度急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）における学生による授業過程の評価の回答の割合

表 1 授業過程評価における自由記載の内容

| 大項目 | 小項目 |
|--------------------------------------|---|
| 指導者の協力的な姿勢による実習への 動機づけの高まりや学びの深まり | 指導者の親身で丁寧な指導でよりよりよく学べた |
| | 受け入れてくれると感じられ積極的に実習できた |
| | 指導者の具体的な助言がわかりやすかった |
| | 忙しくて質問がしにくい状況だった |
| 知識を持ち適切なアセスメントが重要 であることの気づき | 基礎的な知識や疾病理解が重要である |
| | 根拠を持って報告することが重要だと学んだ |
| カンファレンスでの学びの深まり 教員への指導の要望 | カンファレンスで他学生からの助言により気づいた |
| | 教員はわかりやすく丁寧に指導をしてくれた。 教員間で統一性のある指導をしてほしい |
| 物理的実習環境の整備の希望 | 学生控え室を整えてほしい |
| | 電子カルテからの情報収集がしやすかった |

い状況だった」との感想も見られたが、概ね「指導者の親身で丁寧な指導でよりよりよく学べた」「受け入れてくれると感じられ積極的に実習できた」「指導者の具体的な助言がわかりやすかった」との記載が見られた。

【知識を持ち適切なアセスメントが重要であることの気づき】については、「基礎的な知識や疾病理解が重要である」ことに気づき、また看護はチームで行う事から「根拠を持って報告することが重要だと学んだ」との記載も見られた。

【カンファレンスでの学びの深まり】では、「カンファレンスで他学生からの助言により気づいた」のように、グループで実習をする意義について述べていた。

【教員への指導の要望】では、「教員間で統一性のある指導をしてほしい」との要望があった一方「教員はわかりやすく丁寧に指導をしてくれた」との記載があった。

【物理的実習環境の整備の希望】では、実習施設により異なるためか、「学生控え室を整えてほしい」との感想がある一方「電子カルテからの情報収集がしやすかった」との記載も見られた。

7. 考察

7.1. 学生の学修状況

授業過程評価は、質問紙 16 項目中 15 項目で、「全く当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答し肯定的な評価をした学生が 80% 以上という結果であった。特に「実習の目的・目標をふまえた実習の展開ができた」では 95.2% と高い評価が得られた。また、「学内オリエンテーションの内容は実習を円滑に行うために役立った」では 86.8% であったことから、学生は教員による事前の学内オリエンテーションを活かし、自分なりの実習準備ができ、実習・目標に沿って主体的に実習に取り組むことができたことと捉えていることが示された。また、臨地実習指導者や教員の関わりについても 80% 以上の高い評価が得られたことから、学修しやすい指導環境が整えられていることが推測できた。

この結果は、先行研究⁴⁾と比較すると、全体的に肯定的評価が高く、これは他領域の実習を終えた 4 年生の開講科目であることが影響していると考えられる。本学では、成人・老年看護学実習Ⅰを 3 年生で履修しており、病院で成人・老年期にある患者を受けもち、看護過程を展開するといった、成人・老年看護学実習の方法としては共通する実習内容であること、また他領域での実習を積み

重ね、患者や教員や指導者などとの対人関係が養われ、より主体的に実習に望むことができたという評価であると思われた、また、事前課題への取り組みや、基本となる看護技術演習の準備を行ったうえで実習に望むことができたという学生の評価結果であると考えられた。

学生評価が最も低かった項目は、「学内での技術演習の内容は実習を展開するために役立つ」で、56.6%であった。質問紙の回答は、先行研究で用いた5段階リカート尺度の修正を行ったため、平成29年度と比較することはできないが、質問紙16項目中「全く当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答した学生が最も少ないという点では一致していた。これは、実習で実施される技術が、学内での技術演習とは異なり、患者に応じた方法で実施しなければならないために、学生にとっては難しい点があったと推測できた。技術演習では、まず学内で基本を、根拠をふまえて修得できるように支援し、臨床ではその人にあった方法を理解でき、援助場面においては、対象者の反応を捉えその人にあった方法で実施できるよう指導していくことが必要である。

7.2. 自由記載から

昨年度の学生評価からの課題の一つに、カンファレンスへの参加についても課題としてあがっていた。今年度は8割以上の学生が参加できたと答えており、自由記載でも【カンファレンスでの学びの深まり】について述べられていた。学生の多くがカンファレンスは苦手な傾向がある⁵⁾といわれているが、カンファレンスを活性化するために、杉野ら⁶⁾は指導者が学生の観察をよく行い適切な介入を随時行うことが必要である、と述べている。今年度の実習においても、教員と臨床指導者との積極的な介入、例えば学生が話しやすい環境の設定や、テーマに関する助言や学

生の意見を引き出すような助言等が、今回の結果に影響をしていると考えられた。

また、そのほかに【指導者の協力的な姿勢による実習への動機づけの高まりや学びの深まり】の記載が見られた。杉野ら⁷⁾は、実習指導過程における環境調整の4つの側面の一つに「学生と医療スタッフ間のかかわりの推進」があると述べている。学生は緊張する実習の中で、指導者の親身で丁寧な姿勢から、受け入れてくれると感じることができ学習を深めていた。【教員への指導の要望】の中でも、教員間での統一性のある指導は今後の課題ではあるが、教員・指導者のわかりやすい指導があったと記載されていた。教員は、実習開始前には実習指導者との調整や実習開始後も指導者・教員間で連絡・相談・調整を行いつつ学生に関わっていた。このような学生への対応が今回の記載にも結びついたので考えられた。

7.3. 学生評価から課題となること

実践能力を育成するためには、実践と思考を連動させながら学ぶことができるようにする必要があり、そのためには、実習の事前準備や実習中あるいは実習後に振り返りを行うことや患者に合わせた技術を提供するための演習なども実習の効果を上げるためには必要である⁸⁾。特に急性期実習では、生体侵襲や患者の回復過程のパターンについて事前に学習し、実習では、個別性をふまえて援助していけるように事前準備の段階から学生一人ひとりに対する教員の関わりが重要である。また、実習中は、臨床指導者と協働し、患者への援助や看護の工夫を場面ごとにタイムリーに指導して学生の学習を進めていく必要がある。今回、技術演習期間を設け、実習で実施する基本的な技術演習を推奨しても、全員の学生が演習していない状況もあり、清拭を術後患者にはじめて実施するといった学生もいるなかで、自発的に学内で事前準備できるよ

うに支援していく必要がある。

黒田ら⁹⁾は、教員による実習指導は、学生が自分の学習の方向性が見えるかどうかや、教員が学生の個別性や能力をある程度理解し、考慮した指導をするかどうかを看護学生の受け止め方に関係しているとしている。つまり、一人ひとりの学生レディネスに応じた個別指導が重要であり、学生の気づきや経験していることを可視化しながら実習指導していく必要がある。

そして、本学看護学科のカリキュラムは、急性期の講義と演習が3年前期に同時開講となっている。そのなかで、順序性や何を教えれば基本になるのかといったことを再度検討して教育活動を行っていきたいと考える。

7.4. 研究の限界と今後の課題

研究の限界として、平成29年度履修学生と平成30年度履修学生の急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）における授業過程評価の回答の差を比較して課題を明らかにすることはできないことである。また、4ヶ所の病院で実習を行っているため、環境等施設の特徴が反映された結果が部分的に見られたため、今後もよりよい実習となるように実習病院と調整を重ねていく必要がある。

8. 結論

急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）を履修した4年次の学生に急性期実習における学生主体による授業過程評価の質問紙調査をしたことで、下記のことが明らかになった。

- 1) 授業過程評価は、質問紙16項目中15項目で、「全く当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答し肯定的な評価をした学生が80%以上という結果であった。
- 2) 今後の課題として、事前準備の段階から、学生が自発的に学内で技術演習などの

事前準備ができるよう、学生一人ひとりのレディネスに応じた教員の関わりが必要となることが示された。また、実習中は、臨床指導者と協働し、患者への援助や看護の工夫を場面ごとにタイムリーに指導し、カンファレンスで学びが共有できるように学修支援を行っていく必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、質問紙調査にご協力いただいた看護学生の皆様、また論文作成にあたり、ご指導いただいた常葉大学健康科学部の諸先生方に深謝いたします。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

著者貢献度

すべての著者は、研究の構想およびデザイン、データ収集・分析および解釈に寄与し、論文の作成に関与し、最終原稿を確認した。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，9，1～26，2011
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
平成23年2月28日，（平成30年9月2日アクセス）
- 2) 富山ひとみ，千葉のり子，長澤久美子他：急性期実習（成人・老年看護学実習Ⅱ）における学生による授業過程の評価．常葉大学健康科学部研究報告集，5-1：103～109，2018
- 3) 舟島なをみ監修：看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて，216～218，医学書院，2013
- 4) 上武大学 平成20年度 看護学部実習アンケートの分析結果，
<http://www.jobu.ac.jp/pdf/jerc/file6.pdf#search>，

(平成30年8月21日アクセス)

- 5) 杉野元子：第6章臨床指導者・教員のためのカンファレンスの要点：看護カンファレンス，川島みどり，杉野元子編，医学書院，147～168，2008
- 6) 杉野元子，前掲書5)，：147～168
- 7) 杉森みどり，舟島なをみ：看護教育学第4版，277，医学書院，2010
- 8) 厚生労働省，前掲書1)，：1～26
- 9) 黒田裕子，合田友美，小藪智子 他：教員による臨地実習指導に対する看護学生の受けとめ方，川崎医療短期大学紀要，30：23～27，2010